

青年期における学校段階の移行と新友人との友人関係

新友人に求める理想と現実およびそのズレの検討

The transition of the school stage in the adolescence and friend relations with the new friend

Examination of an ideal and the reality for the new friend and the gap

富永幹人・田中あゆみ

Mikihito Tominaga・Ayumi Tanaka

1. 問題と目的

青年期の友人関係は、青年を支えたり、親からの自立を促したりする役割を持ち、青年の成長とともに変化していく関係である。青年期における第2次性徴などに伴う急激な心身の変化や親からの独立は、不安や恐れを伴い、そのために青年には悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になってくると考えられる。従って、このような青年期の親からの独立や自律性の獲得の過程を理解するために、その過程でどのような友人関係の発達的变化が起こるのか、これまでさまざまな研究が行われてきた。落合・佐藤(1996)の同性の友人との付き合い方に関する研究では、中学生では「浅く広く関わるつきあい方」、高校生では「深く狭く関わるつきあい方」が多く見られるという結果が得られ、中学生から大学生にかけて次第に内面に目が向き、悩むようになるとされている。

また、友人関係は、生き生きとした学校生活を送る上で重要なものであり、青年の生活に大きな影響力を持つと言える。青年期は、友人を強く希求する時期であるとともに、友人関係に関する悩みが増える時期であるとも言われる。友人関係は、青年にとってストレス源ともなり、悩みを分かち合うはずの友人関係によってより一層悩みが深くなったり、別の悩みとなることも考えられる。青年にとって、外面的にはうまくいっているように見えても、内面的には満足感を得られていないという友人関係も少なくないようである。松元(1997)は、現代青年の交友関係について、真剣に議

論したり難しい話をするのを避け、明るく気軽に会話でき、お互いに傷つけ合うことがないように距離を置く、といった特徴をあげている。また、高垣(1988)は、現代青年の友人関係について、個々の青年自身は友人との親密で内面を開示するような関わりを求めているにもかかわらず、もしこれを友人に実際に求めれば茶化されたり馬鹿にされたりしてしまうだろうという恐れを持ち、結果的に関わりを避けて、自分をさらけ出さなくなると論じている。しかし、岡田(1999)によれば、このような友人関係を取っている青年自身が、必ずしも自分の友人関係に満足しているわけではない可能性がある。また、吉岡(2001)は、中学生、高校生を対象に、友人関係の理想と現実のズレを検討した結果、特に自己開示において理想と現実のズレが大きいことを明らかにしている。

一方、こうした対人関係の希薄化の議論に対して、浅野(2006)は、現代の青年は、多くの友人関係のチャンネルを持ち、状況に応じて、それぞれの関係を選択的に使い分けていると指摘している。さらに、和田(2001)は、古くからの友人(旧友人)と新しい友人(新友人)との関わりのありようを検討し、大学入学約6ヶ月後の調査では、旧友人の方が新友人より親密で関係満足度が高く、新友人に対しては身近な友人としての期待が現れることを明らかにしている。女性は男性よりも相互依存や自己開示という心理的なものを望むが、それを新友人との間に築くにはかなりの時間を要するので、男性に比べ、物理的距離が大きくなっても、旧友人と自己開示や相互依存などの心理的な関

係を維持し続ける。そして、新友人は、旧友人ほど親密ではなく、また身近にいる友人であるため、「情報」「協力」「共行動」をより求めるとしている。

青年期には、心理的離乳といった発達的な移行に加えて、小学校から中学校へ、中学校から高校へ、高校から大学へと、学校段階を進めていくに従って現実的な環境面でも移行を経験することになり、折り重なる移行の危機を青年は経験する。これを克服することは個人的人間的成長につながるが（山本・ワップナー、1992）、青年期という発達段階を考えるなら、そこで特に友人関係が重要な役割を果たすと言えるだろう。しかしながら、この友人関係にも、学校段階という環境面での移行を考えれば、旧知の友人だけでなく、新しい環境で初めて出会う新友人という存在がある。青年は新しい友人との関係に対しては何を期待し、どのような関係をつくっていくのであろうか。和田（2001）が指摘するように、新友人には「情報」「協力」「共行動」といった比較的表面的なものを求めているとしても、それに満足しているのだろうか。このような新しい友人関係の形成における理想（期待）と現実について取り扱っている研究は見当たらないが、こうした移行をめぐる当事者がどのような情緒を経験しているのかを明らかにしていくことは、移行に伴う危機を理解し、その援助を考える上で有益であると思われる。

ところで、これまでの友人関係に関する研究の多くで性差があることが報告されている。たとえば、アーガイルとヘンダーソン（1985）は、女子は深いレベルの自己開示や愛着、援助を伴う親密で信頼できる関係に価値を置くのに対し、男子は単に「楽しいこと」に価値を置くとしており、こうした報告は、女子の友人関係は、男子と比べて強い情緒的つながりを求める傾向があることを示していると思われる。

以上より、本研究では、特に青年期の女子を対象として、新友人に対してどのような理想を持っているのか、また現実にはどのような友人関係を構築しているのか、そして、新友人に対する理想と現実にはどのようなズレが生じているのかについて検討する。また、青年期においても、青年期前期と青年期後期とでは、発達や友人関係に求めるものも異なってくることが考えられるため、中学生と大学生を調査の対象とし、そ

の異同についても検討することとする。

2. 方法

調査対象

私立女子中学校1年生108名、私立女子大学1年生105名を対象とした。調査時期は2011年11月であった。

調査内容

吉岡（2001）の友人関係測定尺度（27項目）を使用した。新友人に対する友人関係の理想と現実について、それぞれ「非常に当てはまる」から「全然当てはまらない」までの4件法で回答を求めた。具体的な教示内容は、理想については「あなたが入学する前、新しい友人とどのような友人関係をつくりたいと思っていましたか」、現実については「新しい友人との日ごろの付き合いについて、以下の質問にどれくらい当てはまりますか」とした。

3. 結果

(1) 友人関係測定尺度の下位尺度

先行研究に倣って5因子に分け、因子「自己開示・信頼」（項目1・3・6・11・13・18・21・24・27）、因子「深い関与・関心」（項目2・7・15・20）、因子（項目4・12・16・22・26）、因子「親密」（項目8・10・14・19・23）、因子「切磋琢磨」（項目5・9・17・25）とした。各下位尺度についてクロンバックの係数を算出したところ、 $\alpha = .69 \sim .94$ という値が得られた。各下位尺度ごとに（個々の項目得点）/項目数を求めたものを、下位尺度得点とした。

(2) 友人関係測定尺度の各項目の得点

友人関係測定尺度の「理想」「現実」について各項目の平均値を求めた。その結果をTable 1, 2に示す。

新友人との関係に期待するもの（理想）について、大学生では、「10. 共通の思い出をたくさん作る」、「13. 心を許すことができる」、「21. 考えたことや感じたことを正直に話すことができる」などが高い値（3.40以上）を示した。これに対して、中学生では、「1. 何でも話し合うことができる」、「10. 共通の思い出をたくさん作る」、「27. 相談し合うことができる」

青年期における学校段階の移行と新友人との友人関係

Table 1 友人関係測定尺度の各項目の平均値(標準偏差)〈大学生〉

		理想	現実	ズレ
因子Ⅰ「自己開示・信頼」				
1	何でも話し合うことができる	3.30(0.80)	3.13(0.77)	0.16
3	互いに弱い部分を見せ合うことができる	3.07(0.82)	2.86(0.84)	0.21
6	自分のことをよくわかってくれる	3.25(0.77)	2.97(0.74)	0.28
11	自分の嫌なところを見せることができる	2.97(0.81)	2.85(0.83)	0.12
13	心を許すことができる	3.42(0.72)	3.07(0.86)	0.35
18	自分の素直な感情・態度を示すことができる	3.39(0.73)	3.05(0.79)	0.34
21	考えたことや感じたことを正直に話すことができる	3.42(0.69)	3.05(0.79)	0.37
24	隠し事をしなくてもよい	3.06(0.78)	2.91(0.87)	0.14
27	相談し合うことができる	3.32(0.81)	3.23(0.78)	0.10
因子Ⅱ「深い関与・関心」				
2	真面目な話ができる	3.37(0.71)	3.26(0.76)	0.11
7	相手にいつも関心を持つことができる	3.18(0.78)	2.99(0.78)	0.19
15	将来の夢や希望について話し合う	3.10(0.83)	2.94(0.85)	0.15
20	互いに励まし合うことができる	3.30(0.73)	3.04(0.83)	0.27
因子Ⅲ「共通」				
4	趣味や好みが一致している	3.37(0.78)	3.03(0.83)	0.34
12	考え方や感じ方が似ている	3.30(0.81)	3.05(0.79)	0.25
16	いつも自分に関心を持っていてくれる	2.92(0.79)	2.90(0.73)	0.02
22	性格が似ている	2.90(0.95)	2.71(0.88)	0.18
26	気持ちが通じ合う	3.27(0.76)	3.02(0.80)	0.25
因子Ⅳ「親密」				
8	いつも一緒に行動をする	2.99(0.85)	3.27(0.72)	-0.28
10	共通の思い出をたくさん作る	3.45(0.71)	3.18(0.77)	0.27
14	プレゼントをくれる	2.30(0.87)	2.59(0.85)	-0.30
19	電話などでよく話す	2.37(0.95)	2.09(0.96)	0.29
23	嫌なことや悲しいことがあったときになぐさめてくれる	3.08(0.78)	3.04(0.73)	0.04
因子Ⅴ「切磋琢磨」				
5	互いに尊敬し合うことができる	3.36(0.75)	3.00(0.80)	0.36
9	いろいろな面で刺激を与えてくれる	3.33(0.74)	3.12(0.80)	0.21
17	互いに高め合う	3.26(0.83)	3.00(0.82)	0.26
25	自分の知らないことを教えてくれる	3.31(0.75)	3.14(0.75)	0.17

Table 2 友人関係測定尺度の各項目の平均値(標準偏差)〈中学生〉

		理想	現実	ズレ
因子Ⅰ「自己開示・信頼」				
1	何でも話し合うことができる	3.43(0.74)	3.36(0.74)	0.06
3	互いに弱い部分を見せ合うことができる	3.05(0.87)	2.85(0.92)	0.16
6	自分のことをよくわかってくれる	3.40(0.76)	3.36(0.68)	0.04
11	自分の嫌なところを見せることができる	2.83(0.98)	2.85(0.94)	-0.02
13	心を許すことができる	3.38(0.71)	3.21(0.83)	0.17
18	自分の素直な感情・態度を示すことができる	3.39(0.78)	3.22(0.86)	0.17
21	考えたことや感じたことを正直に話すことができる	3.35(0.81)	3.20(0.85)	0.15
24	隠し事をしなくてもよい	3.20(0.89)	3.11(0.87)	0.09
27	相談し合うことができる	3.44(0.75)	3.36(0.72)	0.07
因子Ⅱ「深い関与・関心」				
2	真面目な話ができる	2.94(0.85)	2.85(0.85)	0.09
7	相手にいつも関心を持つことができる	3.12(0.84)	3.20(0.77)	-0.08
15	将来の夢や希望について話し合う	2.93(1.07)	3.00(0.94)	-0.07
20	互いに励まし合うことができる	3.31(0.84)	3.31(0.76)	-0.01
因子Ⅲ「共通」				
4	趣味や好みが一致している	3.11(0.91)	3.24(0.80)	-0.13
12	考え方や感じ方が似ている	3.12(0.87)	3.10(0.87)	0.02
16	いつも自分に関心を持っていてくれる	2.94(0.90)	3.04(0.86)	-0.10
22	性格が似ている	2.78(1.03)	2.98(0.95)	-0.20
26	気持ちが通じ合う	3.34(0.80)	3.19(0.80)	0.15
因子Ⅳ「親密」				
8	いつも一緒に行動をする	3.29(0.84)	3.25(0.87)	0.04
10	共通の思い出をたくさん作る	3.42(0.80)	3.31(0.83)	0.11
14	プレゼントをくれる	2.85(1.01)	3.12(0.97)	-0.27
19	電話などでよく話す	2.64(1.08)	2.64(1.05)	0.00
23	嫌なことや悲しいことがあったときになぐさめてくれる	3.38(0.85)	3.21(0.82)	0.17
因子Ⅴ「切磋琢磨」				
5	互いに尊敬し合うことができる	3.18(0.78)	3.06(0.87)	0.12
9	いろいろな面で刺激を与えてくれる	2.94(0.83)	2.95(0.84)	0.00
17	互いに高め合う	3.22(0.82)	3.05(0.82)	0.18
25	自分の知らないことを教えてくれる	3.23(0.84)	3.25(0.76)	-0.02

などが高い値 (3.40以上) を示した。

一方、現実の友人関係については、大学生では、「2. まじめな話ができる」、「27. 相談し合うことができる」などが高い値 (3.40以上) を示した。これに対して、中学生では、「1. 何でも話し合うことができる」、「6. 自分のことをよくわかってくれる」、「27. 相談し合うことができる」などが高い値 (3.30以上) を示した。

(3) 友人関係測定尺度の下位尺度得点の学校段階比較

友人関係測定尺度の各下位尺度得点について、学校段階による比較を、分散分析を用いて行った (Table 3、Fig. 1)。

理想の友人関係に関しては、「Ⅰ: 深い関与・信頼」、「Ⅱ: 親密」、「Ⅲ: 切磋琢磨」において有意な差が見られた ($F(1,211) = 0.128, ns$ 、 $F(1,211) = 95.398, p < .001$ 、 $F(1,211) = 1.042, ns$ 、 $F(1,211) = 88.750, p < .01$ 、 $F(1,211) = 4.037, p < .05$)。

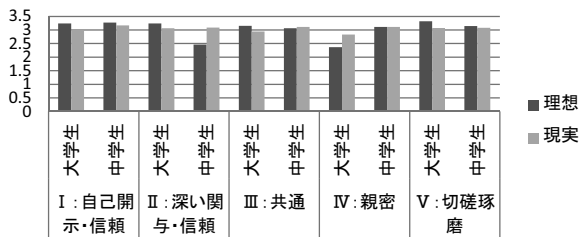


Fig.1 友人関係測定尺度の下位尺度得点の平均値

、 $F(1,211) = 88.750, p < .01$ 、 $F(1,211) = 4.037, p < .05$)。では大学生の得点が高く、では中学生の得点が高いことが示された。

現実の友人関係に関しては、「Ⅰ: 親密」においてのみ有意な差が見られ、「Ⅱ: 自己開示・信頼」、「Ⅲ: 共通」においては有意傾向が見られた ($F(1,211) = 3.328, p < .10$ 、 $F(1,211) = 0.168, ns$ 、 $F(1,211) = 3.409, p < .10$ 、 $F(1,211) = 10.452, p < .01$ 、 $F(1,211) = 0.011, ns$)。では中学生の得点が高いことが示された。

(4) “友人関係の理想と現実のズレ” についての分析

友人関係における理想と現実のズレについて分析するために、友人関係測定尺度の各下位尺度ごとに、(個々の項目の理想 - 現実) / 項目数によって求めた値を、“友人関係の理想と現実のズレ” 得点とした。この“友人関係の理想と現実のズレ” 得点について、学校段階による比較を、分散分析を用いて行ったところ、「Ⅰ: 深い関与・信頼」、「Ⅲ: 共通」、「Ⅳ: 親密」において有意な差が見られ、「Ⅱ: 切磋琢磨」では有意傾向が見られた ($F(1,211) = 2.288, ns$ 、 $F(1,211) = 90.228, p < .001$ 、 $F(1,211) = 8.400, p < .05$ 、 $F(1,211) = 33.086, p < .001$ 、 $F(1,211) = 3.541, p < .10$)。では中学生の方がズレが大きく、では大学生の方がズレが大きいことが示された。

Table 3 友人関係測定尺度の下位尺度得点の平均値(標準偏差)と分散分析の結果

	大学生	中学生	学校段階差
因子Ⅰ「自己開示・信頼」			
理想	3.24(0.62)	3.27(0.61)	
現実	3.01(0.67)	3.17(0.63)	
ズレ	0.23(0.68)	0.10(0.59)	
因子Ⅱ「深い関与・信頼」			
理想	3.24(0.64)	2.46(0.52)	大>中***
現実	3.06(0.68)	3.09(0.58)	
ズレ	0.18(0.71)	-0.63(0.53)	大>中***
因子Ⅲ「共通」			
理想	3.15(0.63)	3.06(0.70)	
現実	2.94(0.66)	3.11(0.67)	
ズレ	0.21(0.70)	-0.05(0.62)	大>中*
因子Ⅳ「親密」			
理想	2.37(0.50)	3.11(0.65)	大<中***
現実	2.83(0.54)	3.11(0.68)	大<中**
ズレ	-0.47(0.60)	0.01(0.60)	大<中***
因子Ⅴ「切磋琢磨」			
理想	3.32(0.64)	3.14(0.62)	大>中*
現実	3.07(0.69)	3.08(0.67)	
ズレ	0.25(0.77)	0.07(0.64)	

*p<.05,**p<.01,***p<.001

4. 考察

(1) 新友人に求める理想の友人関係について

新友人との友人関係に求める理想に関しては、友人関係尺度の「：深い関与・関心」と「：切磋琢磨」の因子においては大学生が中学生よりも得点が高く、「：親密」の因子においては、中学生が大学生よりも得点が高かった。このことから、中学生は新友人との関係に親密さを強く求めるが、大学生にもなるとより深い関わりやお互いを高め合うような関係を、新友人との関係に期待することが示された。中学生くらいの時期には、友人関係で孤立することは大きな不安であり、日ごろ行動を共にする友人を見つけることの意味は大きい。一方で大学生くらいの時期になると、より深い関わりを友人関係に求めるようになる。そのようなそれぞれの発達段階における心性が、今回の結果からも読み取ることができると思われる。

項目別に見た場合、「10. 共通の思い出をたくさん作る」が、大学生・中学生のどちらでも比較的高い値を示した。吉岡（2001）の調査でも、この項目の女子の得点は高い値を示している。女子は、男子よりも情緒的なつながりを求める傾向があるとされるが、そうしたつながりの証しのようなものを作っていくとする気持ちが女子には強く、その気持は大学生でも中学生でもそれほど変わらないのだろう。そうしてつくられた思い出は、卒業などして時間が経ち、友人と離れることになってからも、情緒的なつながりの感覚をもたらしてくれるという期待もあるのかもしれない。

(2) 新友人との現実の友人関係について

新友人との友人関係が実際に始まってからの現実の友人関係については、友人関係尺度の「：親密」の因子において、中学生が大学生よりも得点が高かった。新友人に対する期待としても、中学生は大学生よりも親密さを求める傾向が認められたが、実際の関係が始まってからも、やはり親密さを感じられる友人関係を、中学生は大学生よりも多く作っていると言える。

項目別に見てみると、「27. 相談し合うことができる」は、大学生・中学生のどちらでも高い得点を示していた。しかし、「2. まじめな話ができる」については、大学生は3.26で、全27項目の中でも高い値を示

していたが、中学生は2.85と低めの得点であった。この項目は「理想の友人関係」においても大学生の得点は3.37と高く、中学生は2.94と低かった。このことから、大学生は新友人に対して深い内容の相談をする関係を求め、実際に現実でもそのような関係を築いているが、中学生は大学生に比べるとまじめな話をする関係は新友人に期待しておらず、相談し合う関係を築いてはいるが、まじめで深い内容の話はしていないと言える。さらに、「14. プレゼントをくれる」では、大学生の得点が2.59であったのに対して、中学生の得点は3.12と高めであった。中学生の時期には、まだ十分に深い自己開示をし合うような関係を築くには難しさがあり、それ以前に友人関係で嫌われることや浮いてしまうことを恐れる傾向があると思われるが、友人関係における親密性についても、深い話をし合うというよりは、「プレゼント」のような形のあるもの、目に見えるモノのやりとりによって、それを深めたり確かめたりする傾向があるように思われる。

以上より、中学生は大学生よりも新友人との関係において親密さをより築いていると言えるが、関係性の質の面で考えると、中学生のそれは大学生と比べて必ずしも深い話をし合うようなものではなく、モノによって関係を確かめ合うような、言うなればまだ不安定さを抱えた関係であるように思われる。

(3) 新友人に対する理想と現実のズレについて

新友人との友人関係に求める理想と、新友人との友人関係の現実とのズレについては、「：深い関与・信頼」「：共通」「：親密」において、大学生と中学生との間に有意差が認められた。

「：深い関与・信頼」について見てみると、中学生よりも大学生の方が理想と現実のズレが大きいのだが、現実については大学生の得点が3.06、中学生の得点が3.09と有意差も見られず、理想についての大学生の得点（3.24）が、中学生の得点（2.46）よりも有意に高かったことから、この結果が生じたことがわかる。つまり、これから出会う新友人に対して、中学生よりも大学生の方が、深いかかわりや信頼を結ぶことを期待しているけれども、実際に新友人との関係が始まってみると、大学生も中学生とそれほど変わらない程度にしが深いかかわりや信頼を築けていないということ

である。大学生は、新しい友人関係に期待していたものが現実には得られていないということであり、フラストレーションや失望を感じている可能性があると思われる。このズレを生み出す要因については検討が必要であるが、このようなズレは、大学生が学生生活にスムーズに入っていくことや学生生活の満足感の高低に関わる問題であり、このズレにどのように対応していくことが必要かの検討も重要になってくると思われる。一方、これに対して中学生では、理想の得点(2.46)よりも現実の得点(3.09)の方が高く、新友人との関係で期待していたよりも実際の方が深いかかわりや信頼を築くことができていると言える。さらに項目別に見ると、やはりまじめな話をするということは現実の関係でできていないけれども、夢や希望を語り合ったり、互いに励まし合ったりすることが、期待していたよりも現実にはできているようであった。こうした結果は、相手からどう思われるかを気にしてしまうというこの発達段階に顕著な不安から、当初新友人に対する期待は低く抑えられているけれども、比較的前向きな話題においては、実際には深いかかわりや信頼を築くことができていることを示しており、対人関係における発達段階的な不安がある一方で、より深い関係を築きたいというやはりこの発達段階特有の欲求の高まりが、このズレに表されているように思われる。そして、前向きな話題から始まって、徐々にまじめな話もする深いかかわりへと進んでいくのであろう。

次に「：共通」について見てみると、大学生の方が中学生よりも理想と現実のズレが大きかった。大学生、中学生それぞれの理想と現実の得点も含めて考えると、「：深い関与・信頼」での場合と同様に、大学生は新友人との関係で、期待していたようには趣味や考え方などで一致するものを感じられていないことがわかる。こうした「共通」の感覚はわかり合えるという感覚を生み、新しい関係を築く上では重要な要素となることが多いと思われる。高校までは基本的に同じ地域の者同士が集まり、個性の違いはあるけれども、基本的に通じ合える同じ文化的背景をもっていると言える。しかし大学は、幅広い地域から学生が集まり、方言はもちろんだが、何かしらそれまで当たり前だったことが、すぐには通じないということも経験されることになる。また、大学という環境では、高校までの

クラスという枠組みがなくなることから、新友人と関わる機会が限定される。そのため、知り合っていく中で見えてくる「共通」部分を見出すまでに至らず、浅い関係で終わってしまうということも考えられるだろう。大学生は、悩みを語り合うなどより深いかかわりを求めているが、そうした関係の土台となるような、通じ合える「共通」の感覚を新友人との間にもつことに、まずつまづいてしまうのかもしれない。

最後に「：親密」について見てみると、理想と現実のズレの大きさ(絶対値)では、やはり大学生の方が中学生よりも大きいことがわかる。理想と現実の得点はいずれも中学生の方が大学生よりも有意に高かったが、大学生の得点で見ると、理想の得点が2.37であったのに対して現実の得点は2.83であった。このことから、大学生は新友人にそれほど常に行動を共にするような親密さは期待していないが、実際にはある程度はそのような関係を新友人との間に形成していることがわかる。中学生に比べて大学生は、こうした親密さはもう求めなくなってきていると同時に、大学では授業も個人で組むことは入学前から概ね知っているの、大学生になると個人で行動し、常に行動を共にするようなことは期待していないということではないだろうか。

(4) 総合考察

本研究では、新友人との関係における理想と現実、およびそのズレについて、発達の側面から検討した。中学生では、先行研究が示すのと同様に、深い関係はそれほど期待せず、まずは共に行動するような親密さを求め、現実でも概ねそのような関係を築いていることが示された。しかしながら、まじめな話をするには至らないながらも、夢や希望を話し合ったり、励まし合ったりするような親密さは、入学前の期待よりも新友人と持っていることが示された。一方、大学生では、やはり先行研究が示すように、深いかかわりを新友人に対しても求めているが、現実にはそうした関係を期待していたほどには築けていないことが示された。その要因の一つとして、考え方などが一致しているといった「共通」の感覚をもつことが新友人との関係でまずできていないという問題があり、そのために新友人との関係を、深いかかわりをするとところまで深められな

いでいることが考えられた。「クラス」という枠組みがなくなる大学という環境では、新友人と深く知り合う機会が限られるため、そのような機会を意図的につくっていくことも大切ではないだろうか。この点については、その要因や対応について、今後さらに検討が必要と思われる。

引用文献

- アーガイル, M・ヘンダーソン, M (著) 吉森護 (編訳)
(1992) 人間関係のルールとスキル 北大路書房
- 浅野智彦 (2006) 若者の現在 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌 失われた10年の後に 勁草書房 pp.223-260.
- 岡田努 (1999) 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田努 (2010) 青年期の友人関係と自己 現代青年の友人認知と自己の発達
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達との付き合い方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 高垣忠一郎 (1988) 自分をつくる 心理科学研究会 (編) かたりあう青年心理学 青木書店 pp.55-82.
- 松元泰儀 (1997) 人間関係の変化・親子関係 青年心理学概論, 98-109.
- 山本多喜司・S・ワップナー (編著) (1992) 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 吉岡和子 (2001) 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.
- 和田実 (2001) 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72, 3, 186-194.